

天皇於後房著御禮服略○中 次伴佐伯下壇北面立門部開門還本部諸門召鼓群臣列立民部卿後權

大納言實經權中納言國信參議左大辨重資依爲四位付玉佩後忠四位付六人列立版位叙人列立兵

部列六位、申正刻、天皇御高座皇后同御攝政令候給、內只一人也、

〔讚岐典侍日記下〕十二月二年嘉承朔日まだ夜をこめて大極殿にまゐりぬ、西の陣に車よせて、えん

だうまきて入べき所とてまつらひたるに参りぬ、ほのくくと明はなるゝほとに、かはらやども

のむねかすみわたりてあるを見るに、むかしうちへまゐりしに過さまに見えし程なぞ思ひ出

られてつくくと詠るに、中人ども見さわぎいみじく心ことに思ひあひたるけしきどもに

て見さわげども、我は何事にも目もたゝずのみおぼえて、南のかたをみれば、いのやたからす

見もまらぬものども、大かしらなぞたてわたしたる、見るも夢のこゝちぞする、かやうの事は世

繼なぞみるにも、その事かゝれたる所はいかにぞやおぼえてひきこそかへされしか、うつゝに

けざくと見るこゝちたゞおしはかるべし、日たかくなる程に行幸なりぬとてのゝまらあひ

たり、殿原里人なぞ玉のかうぶりし、あるは錦のうちかけ、近衛づかさなぞよろひとかやいふ物

著たりしこそ見もならず、もろこしのかたかきたるさうしの晝の御座にたちたるみるこゝ

ちよとあはれに、かくて事成ぬおそしとて、衛門の佐いとおびたゞしげにびさもんなぞを

みる心ちして、我にもあらぬ心地しながらのぼりしこそ我ながら目くれて覺えしか、手をかけ

さするまねしてかみあげよりとばりさしつ、我身いせずともありぬべかりける事のさまか

な、なぞかくしおきたる事にかとおぼゆ、御前のいとうつくしげにまたてられて、御もやのうち

にゐさせ給ひたりけるを見参らすもむねつふれてぞおぼゆる、大かた目もみえずはぢがま

しさのみ世に心うくおぼゆれば、はかくしくみえさせ給はず、事はてぬればもとのところに

すべりいりぬ、夜に入てぞかへりぬる、